

『罪深き吐息さえも愛おしく』

著: 華藤えれな

ill: 有馬かつみ

「ぼくは、あの、貧しい離島で育ったんです。本土からも離れ、珊(さん)瑚(ご)礁(しょう)に囲まれた古くて、因習が根強く残る島で……近代的な医師よりも占い師や御(み)巫(こ)の言葉のほう信用される土地柄なんです。インフルエンザが流行ったとき、医師や薬が足りなくて……老人や赤ん坊が次々と亡くなって。そのとき、医師になろうと決心したんです。海外の研修に行ったのは、無医村の島に行く前にもっと大変な現場を見知っておいたほうがいいからと大学時代の先輩が誘ってくれて……」

自分の足跡やこれからの夢を生き生きと話す姿はまだ十代の少年のようだ。

彼がいかに医療への純粋な志を持っているかはわかった。彼は儂(はかな)げな細かい躰の奥に、なににも屈しない心を持った男なのだ。

彼の口からは、医師免許を取ってわずか数年の間に経験した貴重な医療現場の話聞くことができた。

地域住民の紛争に巻きこまれ、怪我をしたままネパールで熱病に罹って帰国するまでの、体験談は、志岐には刺激的で、ドラマのように楽しいものだった。

自分には許されない世界だからこそ、いっそう興味をおぼえたのもある。

もし、自分がそういうことをしようとどこかの協会に申しこんだとしても、父か姉が組織に圧力をかけてあきらめさせるだろう。

ふっと志岐が視線を落とすと、蓮見は心配そうに問いかけてきた。

「あの、ごめんなさい、こんな話、つまらないですよ。調子に乗って自分の話ばかりしてしまっ。志岐先生のような方にこんな話をしても……」

「なんでそんなふうに自分を卑下する。悪い癖だ。君の話は同じ医療を志す人間としてとても興味がある」

「志岐先生……でも志岐先生は大学病院の最先端医療の現場で、軽々と難手術をこなすようなすばらしい技術の持ち主で……」

「だからどうした。俺も君も同じ医師じゃないのか」

「え……」

「俺も無医村の医療や医療ボランティアには興味がある。人を助けるということには変わりない。君はもっと自分の足跡に自信と誇りを持つんだ。もっとアピールしようとする気概がないと、地域医療や途上国の医療ボランティアの数は増えないぞ」

叱咤するように言うと、蓮見はこれ以上ないほど透明な笑みを浮かべた。

「え、ええ、そうですね。現場には患者よりも研究センターの大学病院や巨大病院にはない良さがあるんです。患者と面と向きあっていくようなところに惹(ひ)かれるんです」

「でも、研究がないと医療の発展はない」

「それはわかっています。だから少しの間、最先端の医療に触れようと思ってここにきました」

「じゃあ、君はまた開発途上国へ医療活動をしに行くのか」

「ええ。春から」

「春？」

「はい。その派遣期間が終了したら、いつか離島に行って医療に従事します。今はまだ離島医療の専門チームができていないので、まずは海外の現場で実績を積んで、企業の協賛や協力を受けられるようにして……と考えています」

さらりと告げられた言葉に、志岐は自嘲気味に嗤った。

彼は別に自分に気があったわけではないのか。医療への真摯な態度から察するに、この男は、腕のいい医師としての志岐栄司の名に興味があっただけだ。

「つまり、君は自分本来の仕事の空き時間に大学病院をちょっとばかり覗きにきたというわけか」

志岐はいささか皮肉をこめて言った。

「ええ。もともと大学病院の人間関係や金儲け主義の巨大病院は苦手ですから」

彼の言葉を聞いているうちに、自分がひどく惨めな気がしてくるのはどうしてだろう。

彼のひと言ひと言に自分が否定され、自尊心が傷つけられたように感じる。

大学病院、金儲け主義の巨大な病院……と自分のいる場所を否定されたせいだ。

教授がジョッキの中身をぶちまけなくなったのもわかる。

それはこの男のまっすぐな気質のせいではない。彼の無神経さのせいだ。

大いなる理想に向かって突き進んでいる一途なまでの情熱。

そして医療の根源的な場所で働いているという誇り。

この男は、一見、オドオドとして気弱で、自信がなさそうに見えるその奥に、決して曲げることのない鋼のような信念を持っている。

金や地位への執着をなげうち、無欲で医療に尽くそうとする崇高な精神をにじませた言葉によって他の医師を知らず断罪していることに気づいていない。

彼の腹が立つほどの純粹さに、教授はカッとなくなってしまったのだ。その気持ちは自分にも理解できる。だが、だからといってああいう形で苛立ちを態度に出す気はない。

そんなことをしても、この男にはなんの影響もないからだ。

それどころか、やはり大学病院には自分を理解してくれる人はいないと思って背を向け、さ

らなる己の理想に向かってひたすら邁(まい)進(しん)していくに違いない。

——そう、教授のようなことをしても、この男をつけあがらせるだけだ。

それよりももっと本質的な部分でこの男を揺さぶってみるにはどうしたらいいのか。

「なかなかすばらしい心がけだな。君のような目標を持った医師は少ない。これからも話を聞かせてくれるか」

「え、ええ、もちろんです」

うれしそうに蓮見が口元を綻ばせる。赤く染まった頬。このあからさまな喜びようはどういうことなのだろう。自分に対して好意を抱いているとしか思えない。

「これは、紛争地帯で負った傷か？」

目を細め、志岐は彼の顔を覗きこみながら、そのこめかみに手を伸ばした。

頬にかかった艶やかな黒髪を梳(す)きあげ、耳の付け根のあたりに残る細い傷痕を指先で撫でていく。ピクン……と電流が奔(はし)ったように躰をこわばらせ、蓮見は上目遣いで自分を見てきた。

目元が張りつめたように震えている。素肌にバスローブをまとい、髪を掻きあげると、彼からにじみ出ていた野暮ったさは消え、人間として本来持っている、造形の美しさだけがきわだって目が離せなくなる。

それと同時に、彼が漂わせる空気感に心地よさを感じた。

この季節にたまに見かける白椿にうっすらと浮かぶ露を思わせる、凜とした透明な水滴のようだった。

「これは……ずっと前に、銃弾がかすったときのことで……たいしたことはありません」

明らかに自分を意識して、上ずってしまっている声。視線をそらさず、志岐はやわらかな声で言った。

「他には？」

彼の目をまっすぐ見つめながら、すーっとその頬にかかった髪を掻きあげていく。指先から伝わってくる、彼の異様なまでの緊張。

「あの……ええ……あちこちに……擦過射創の痕跡が」

「ここ、これも……そのときの傷？」

首筋からバスローブの襟元まで手を下ろし、するりと布のなかに手を滑らせてその陰から見え隠れしていた傷痕を指でなぞった。

彼が息を呑み、困惑したように唇を震わせる。

「あ、あの……志岐先生……」

「見せてくれ、もっと君の傷痕を」

グイとバスローブの前を開くと、彼の白い肩口に銃弾がかすったような痕があった。

肩口だけでない、腕や腿にも。それに腹部には火薬の爆破を浴びたような火傷の痕。

こんなになっても、それでもまた現地に戻ろうとする彼の意志の強さ。

ふいに崇高な目的を持つ医師を墮落させてみたいという衝動が衝きあがってきた。

自分よりも純粋で、自分よりも確かな信念を持つこの男を支配したい。

そんな歪んだ欲望が胸に湧いた。

惹かれたからではなく、ただ弄(もてあそ)んでみたいという思いが。

すっと脇の横のあたりについた傷痕を撫でると、彼は震える声で呟いた。

「綺麗な指ですね。細くて長くて……それでいてしなやかな獣のような強さを感じる」

儂い声だったが、自分の指を捉(とら)える彼の眼差しは甘く潤んでいた。

「しなやかな獣？」

訊き返すと、彼は視線をあげた。一瞬、なにかに吸いこまれるように自分を仰(ぎよ)う視(し)したあと、ハッと我に返ったように恥ずかしげに言葉を詰まらせた。

「あ、す……すみません……あの……変なことを言って」

この男は自分に憧れ、心酔している。

その感情を執着と官能に変えてみるのもおもしろい。

彼もしょせん人間という動物。崇高な目的を持った医師である前に、動物としての本能や欲の前には脆(もろ)くも崩れる獣でしかないはずだ。

それをこの無神経なまでに純粋な男に存分に思い知らせてやりたい。そんなふうに思った。

「キス……していいか？」

その背を抱きこみ、志岐は顔を近づけていった。

「えっ」

「いやか？」

「いえ……あの……」

また、すみませんが……という言葉が出てきそうな気配がして、志岐はそのまま彼の唇を吸った。

「ん……志……っ」

やわらかな優しい唇だった。しっとりと静かに押し当てると、一瞬、吸いこまれるように彼は唇をゆだねたものの、すぐになにをされているのかわかった様子で、軀を硬くした。

「先生……こんな」

だめです……と腕のなかでもがく彼の軀をさらに強く抱きしめて抵抗を封じる。

折れそうなほど細く、薄い軀だった。

「欲しい……君が。今夜はそばにいてほしい」

そう言ってもう一度唇を吸ったとき、蓮見は全身からなおも緊張を漂わせながら、それでも抗うことはなかった。

本文 p48～55 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>